「心を開かれる」　　東京バプテスト神学校生　　大下　仁

マケドニア伝道という新しい使命を与えられたパウロは、テモテやシラスらと共に港町トロアスから船出し、およそ200キロ離れたフィリピに渡りました。フィリピは、かつてクレニデス（「泉」の意）と呼ばれ、金鉱山に恵まれ古くから金銀の採掘で栄えた町でした。しかしユダヤ人の数は少なく、かれらの礼拝施設である会堂（シナゴーグ）もなかったため、安息日ごとに川岸に集まって、礼拝を捧げていたようです。パウロはここに出向いて、集まっていた婦人たちに福音を宣べ伝えました。その中に、リディアという女性実業家がいました。彼女の出身地は遠く離れたティアティラというところでしたが、そこは巻貝の貝殻から作られる紫の染料で有名であり、これで染めた紫布が特産品になっていました。リディアは、この紫布をフィリピに運んで商売を行い、成功をおさめていました。彼女は、神を敬う人でした。そして、パウロの伝道を通してキリストとの出会いが与えられ、まことの信仰へと導かれていきました。イエスをキリストであると確信し、彼女とその家族もバプテスマを受けました。聖書は、リディアの身に起こったことを、「主が彼女の心を開かれた」と説明しています。私たちにも、主は時を捉えて内面に働きかけてくださり、頑なな心をも開き、新しい気づきを与えてくださいます。このことを大切にしたいと思います。小さな気づきにも注意深く心を向けて、その気づきに応えて行く歩みをさせて頂きたいと思います。バプテスマを受けたリディアは、パウロたちに自分の家を宿として提供しました。そして、この家がフィリピでの伝道の根拠地となり、やがて大きな教会へと成長していきました。紫布の商人リディアは、神様を第一にする人、み言葉を聞いて受け入れる人、そして福音宣教を支える人として生きました。そのように神様はわたしどもを愛して、一人一人に生ける神様の作品としての人生を歩ませてくださいます。そのことを覚えて、また感謝して、皆様と共にこれからも歩み続けたいと願わされます。